

西成区の地域福祉の推進に向けた令和2年度の取り組み（重点項目）

①【独居高齢者への支援】

②【認知症高齢者への支援】

①の「課題解決に向け取り組むべき方向性」

- ・「西成つながり名簿」を活用した各地域の見守り活動の後方支援
- ・啓発や関係機関との顔の見える関係づくり

①の「具体的取組」

- ・「見守りサポーター」について、区内8地域でモデル実施を行う。
- ・見守り相談室と連携し、「見守りサポーター」から得た地域情報を「西成つながり名簿」に反映させて整備を行う。
- ・整備した名簿情報は、必要に応じて地域の見守り活動にフィードバックする。

②の「課題解決に向け取り組むべき方向性」

- ・認知症サポーター養成講座の開催と活動
- ・関係機関との顔の見える関係づくり

②の「具体的取組」

- ・オレンジサポーター、オレンジパートナー企業の活動を周知しながら、認知症の方への支援につなげる。

①及び②の「めざす姿」

- ・「西成つながり名簿」を活用した、地域実情に応じた見守り活動のきっかけづくり
- ・地域の認知症対応力の向上及び見守りサポーターなど、地域協力者の発見と確保
- ・モデル実施状況を検証し、見守り体制の強化のため次年度の取組みに反映させる。

③【複合する課題を抱えた世帯への支援】

③の「課題解決に向け取り組むべき方向性」

- ・「つながる場」の充実と、地域での住民主体の「かけはし」の構築と定着

③の「具体的取組」

- ・「つながる場」のスーパーバイザー（SV）バンクの充実を大阪市へ要望する。
- ・各地域で開催される会議等に参加し、地域福祉計画とともに「つながる場」を周知する。
- ・「つながる場」開催時に、必要に応じて地区担当民生委員等、地域住民の方に参加を依頼、又は会議内容を地域にフィードバックし、見守り活動の連携と強化を行う。

③の「めざす姿・取組指標」

- ・アンケート結果（資料5-2）より、参加者のほぼ全員より「今後の支援に活かせる」との回答あり、引き続き、専門職だけでなく地域関係者も含めた連携を図り、効果的な状況を継続する。
- ・参加者アンケートの実施により、「理解が深まった」等の効果的な意見が、全体の80%以上となることをめざす。

令和元年度 総合的な相談支援体制（つながる場）開催状況について

※10件（11件中）の支援は継続中

< 世帯類型 >

母子世帯 2事例
8050世帯 4事例
単身世帯 4事例
その他世帯 (祖父母と孫) 1事例

< 課題 >

複合課題
制度の狭間
継続支援が 困難
主となる支援 機関がない
地域から孤立

< 支援の方向性 >

半数以上で障がい者基幹 相談支援センターの参画 を依頼し、新たな支援機 関に繋ぐ
高齢者領域と障がい者領 域の連携のために、つな がる場を活用する
支援拒否傾向のある支援 対象者には、積極的なア ウトリーチが必要
地域関係者の会議への参 加、又は会議内容の フィードバックと見守り

< 具体的事例 > ゴミ屋敷で暮らす引きこもりのある世帯

生活状況

- ・母（70代）と20年に渡る引きこもり状態の娘（40代）との2人世帯。
- ・母の年金で生活しているものの、浪費による借金があり経済的に困窮
- ・室内はゴミ屋敷状態で、支援者で片付け中であったが、直後に2人が入院する。

支援方針・役割分担

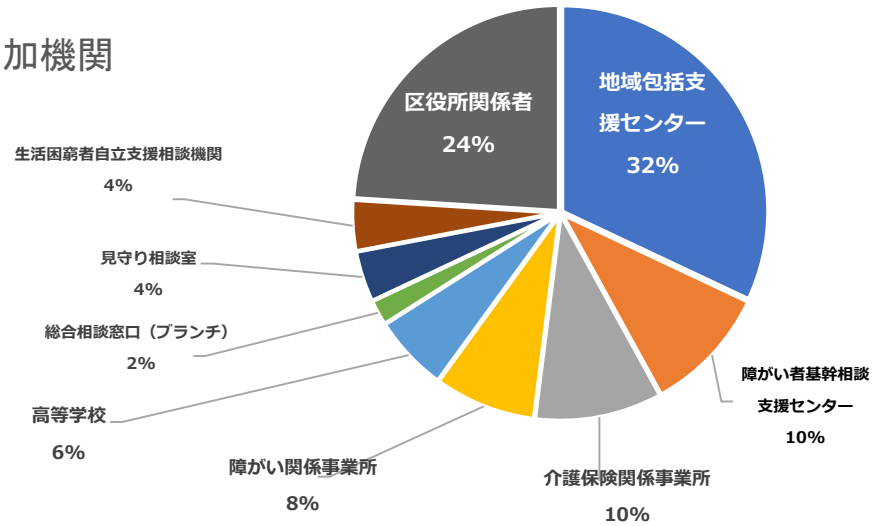
- 母：成年後見人を選任し、退院後施設入所をすすめる。
娘：医療機関受診の支援、生活保護の相談、退院後の障がい福祉サービスの利用及び新たな住居の確保を行う。

支援後の状況

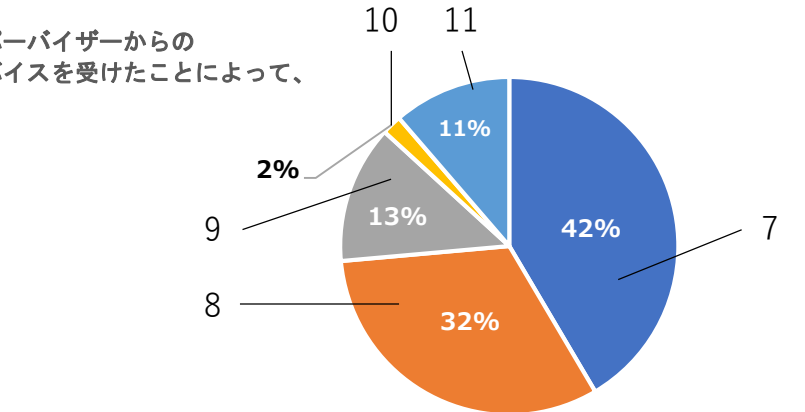
- 母：区内の病院へ入院中、変化なし。
娘：10月に精神科受診を行う。
<障がい者基幹相談支援センター>
センター近くの物件を娘に紹介し、見学する。
<R2年1月>
母：入院中。
娘：退院後単身生活を開始。
障がい者基幹相談支援センターを通じて、日常生活の家事や金銭管理の支援を受けながら、簡単な調理を行い自炊できるようになる。
室内もゴミがあふれることもなく整っている。
娘は、就労意欲を見せており、今後、障がい福祉サービスを利用し生活を安定させ、就労に向けて支援していく。
<R2年4月>
母：入院中
娘：生活状況の安定継続。

令和元年度 つながる場アンケート 集計表

参加機関

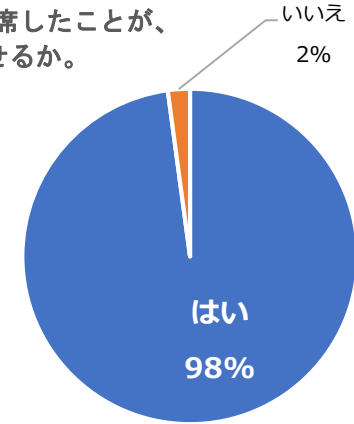


スーパーバイザーからのアドバイスを受けたことによって、

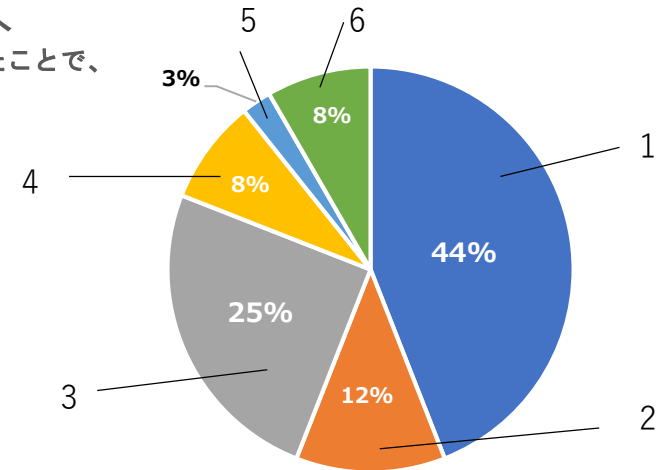


- 7 要援護者 (要援護世帯) の抱える問題を、解きほぐすことができた
- 8 他機関の関わり方が明確になった
- 9 地域 (見守り活動等) を意識することができるようになった
- 10 支援に自信が持てるようになった
- 11 その他

問1 「つながる場」に出席したことが、今後の支援に活かせるか。



「問1 はい」の方へ関係者が一堂に会したことで、



- 1 顔の見える関係づくりができた、もしくは、そのきっかけができた
- 2 要援護者 (要援護世帯) の抱える問題を、解きほぐすことができた
- 3 他機関の関わり方が明確になった
- 4 地域 (見守り活動等) を、意識することができるようになった
- 5 自機関 (担当者) で抱えていたケースを関係者と共有することで、気持ちが楽になった
- 6 その他